



堀井良殿

官僚です。政治家が法案を出せば、それを通すために根回しをするのが官僚の仕事なんですね。例えば原子力発電所をつくる当初、万一事故が起きたときのリスクが大きいという理由で電力会社各社は反対しました。そこで原子力災害対策特別措置法などをつくって国の補償体制をつくるのですが、そうした法案を通しやすくするのは官僚です。審議会を組織する際にも、審議会で決められる内容や方向性に沿った考えをもつ大学教授などは官僚が人選します。こうしたことは6,000人の課長補佐と2,000人の課長級以上の官僚が鉛筆を舐め舐め、また根回ししながら決めていることで、私が官僚だった時代からこのやり方は変わっていないでしょう。いくら政治主導を唱えても、この体制を変えることは並大抵のことではありません。第二次世界大戦後、マッカーサーは軍閥や財閥を解体しましたが、官閥だけは温存した。占領政策を進めるためには、そのほうが好都合だったんですね。官僚からは戦犯も出ていません。だから今でも日本を実質的に動かしているのは、政治家ではなく霞ヶ関官僚だと言っても過言ではありません。堀井 このままでは絶望的ですね。官僚も生かし、民間も生きる道はないのでしょうか。

上田 だからその突破口になるのが“絆友”なんです。本来、日本は分散型の社会だったのですが、明治維新によって中央集権体制に変えられてしまいました。ですから日本を再び分散統治型の社会に戻そうということです。1853年にペリーが黒船を率いてやってきて、その15年後の1868年に江戸幕府が倒れました。当時、そんな大きな政変を予

想したサムライはどれだけいたでしょうか。「尊王攘夷」という言葉が出た当初は、誰も見向きもしませんでした。いったんそれが理解されると、燎原の火のように広まりました。日本は情報伝達が発達していますから、変わる時は恐ろしいまでに変わるんです。

堀井 上田先生が提唱される絆友社会のように、自らのことは自らで行うという意識を持ちつつ、それでも足りないものは連帯して国レベルで考えるという、しくみにしていくべきでしょうね。国民はこれまで、“民をして由(よ)らしむべし、知らしむべからず(為政者は人民を施政に従わせればよい)であり、その道理を人民にわからせる必要はない／論語「泰伯」”ということに慣らされてしまったように思います。昨今はマスコミも付和雷同した論調が幅を利かせ、政治がパフォーマンスになってしまっている。ワンフレーズポリティックスがもてはやされ、政治の劇場化現象が起っている。そうした結果、文化軽視、地方の疲弊、社会の混迷と閉塞感を生んでいる。こういう日本の状況を変えるためにも、明治維新の問題の原点に立ち返って考えるべきでしょうね。

上田 西郷隆盛をはじめ大久保利通や木戸孝允は明治維新三傑と言われていますが、伊藤博文や板垣退助、岩倉具視のように紙幣の肖像にはなっていません。いまだ彼らの評価が定まっていなからです。日本の政治家や官僚、学者たちは、いまだに明治維新の総括をしていない、あるいはできていないんです。とくに逆賊とされた西郷となるとどう評価していいかわからないんです。堀井 ともあれ、私はスイスにも行って

ろいろ調べた結果、西郷がめざした自立した地域社会の集まりによってこそ、“小国大輝”の日本が実現するという思いを強くしています。日本は経済大国になりましたが、国土や資源は乏しい。しかし、そんな小さな国でも文化によって大きく輝くことができるんです。そしてその文化とは、“動的平衡社会”によって育まれるものだと考えています。動的平衡とは生物学用語で、生物を構成している細胞や組織は新旧の分子が入れ替わりつつバランスを保つことをいいます。つまり人間の身体の細胞の中身は3か月ですべて入れ替わりますが、外見は変化せず保たれているというものです。私は、社会も動的平衡によって安定し持続するのがよいと思います。1万年以上続いた縄文時代は、社会が独立した集落(細胞)の集合体、つまり分散自立型社会だからでした。いくつかの集落が災害や疫病などで全滅しても、すぐ新しい集落ができて縄文社会全体としては変わらず存在し続けました。翻って現代の日本は中央集権社会ですから、東京が全滅したらもう終わりでしょう。しかも、そんな社会において「経済性・効率性」という市場原理で文化を削っていけば、いずれ文化はなくなってしまし、国や地域を弱体化させてしまいます。採算や効率を最重視する市場経済ではなく、行動の多様性を重視した“文化経済”によってこそ、国家や地域の持続性が保たれるのです。

堀井 市場経済ではなく文化経済によってこそ国や地域が保たれるというお考えは、とても説得力がありますね。本日はどうもありがとうございました。(2011年8月2日/大阪21世紀協会にて)

上田 篤氏
昭和5年(1930)大阪市出身。京都大学工学部建築学科および同大学院卒業後、建設省入省。京都大学、大阪大学、京都精華大学各教授を経て、現在、NPO法人社叢学会副理事長、西郷義塾塾長。日本建築学会特別賞、日本エッセイストクラブ賞、環境優良賞、毎日出版文化賞など受賞。近著「庭と日本人(2008年・新潮社)」「西郷隆盛ラストサムライ(2009年・日本経済出版社)」「週刊伝説と国づくり(2011年・鹿島出版会)」など。主な建築作品「大阪万国博覧会お祭り広場(1970年・日本万国博覧会協会)」「洛西ニュータウン(1982年・京都市)」「京都精華大学キャンパス(1997年・京都精華大学)」など。



伝統神事・祭礼を間近で見学 「南大阪・上町台地フォーラム」報告

大阪・関西の伝統行事や伝統芸能などを支援する大阪21世紀協会では、平成23年度より南大阪地区の歴史文化の探究・活性化をテーマに、「南大阪・上町台地フォーラム」を開催しています。今年度は会員ならびに一般の方を対象に、上町台地にある神社・仏閣の神事や祭礼の見学会、講演会を開催するとともに、これら伝統行事を記録・発信しています。今年度のフォーラム対象行事をご紹介します。

平安貴族をも魅了した
優雅な舞楽大法要

四天王寺

しょうりょうえ
聖霊会(4月22日)

四天王寺(大阪市天王寺区)は、推古天皇の甥にあたる聖徳太子が崇仏派の蘇我馬子と共に挙兵した折、廃仏派の物部守屋への戦勝を祈念して593年に建立された。聖霊会(しょうりょうえ)は聖徳太子の命日(旧暦2月22日)に行われる当寺のもっとも重要な

大法要で、現在は毎年4月22日に行われている。

伽藍の北にある六時堂に仏舎利と聖徳太子の御霊を迎えて催行され、法要の間は、堂前の石舞台で天王寺楽所による舞楽や舞楽(重要無形文化財)が途切れることなく奉納される。平安時代には都の貴族の四天王寺詣の楽しみのひとつだったともいわれ、今なおその優雅な調べと舞は多くの参詣者を魅了している。今年は雨天のため、舞楽は六時堂内で行われた。

大阪21世紀協会では、当法要を「南大阪・上町台地フォーラム」の第1回として、賛助会員の皆様に六時堂縁側の特別席で参観いただいた。さらに5月14日には、同寺本坊にて四天王寺大学教授の南谷美保氏と同寺執事の南谷恵敬氏による講演会を開催し好評を得た。



聖霊会に欠かせない舞の「蘇利古(そりこ)」。この曲の間に太子御影の帳が上げられる。



六時堂前の「石舞台」。天候が良ければこの上で舞楽が行われる。

いくくにたま
生國魂神社
大阪三大夏祭りのひとつ
「陸のいくたま」



生國魂神社(拝殿)と本殿(拝殿の奥)

いくたま夏祭り(7月11・12日)

生國魂神社(大阪市天王寺区)はもともと大阪城の近くであり、豊臣秀吉が築城する際に現在の地に移転された。毎年7月11・12日の生國魂神社夏祭りでは、同社から大阪城に向けて御鳳輦(ごほうれん)の陸渡御が行われている。いわば「里帰り」だ。最盛期の明治から昭和初期には千人を超える人々が繰り出し、「陸のいくたま」「川の天神」と称されるほど賑わった。現在は交通事情を踏まえ、御鳳輦を車で運んでいる。この日は子供神輿や獅子舞、枕太鼓なども繰り出し、子どもから大人まで大勢の人で溢れんばかりとなる。

同社のご祭神は国土の守護神である生島大神と足神大神、生活全般の守護神・大物主大神(ダイコクさん)など。その昔、上方落語の祖・米澤彦八が境内で上方落語をひろめたことから芸事の神様とも言われている。

いくね
生根神社
大阪に唯一残る
「だいがく」を公開



生根神社本殿と「だいがく」

だいがく祭り(7月24・25日)

「だいがく」とは「台楽」または「台額」と書き、雨乞いの神事に使用される櫓のこと。清和天皇の時代、難波の地一帯を早魃が襲った際、日本60余州の一の宮の御神燈と鈴を付けた櫓を立てて雨乞い祈願をしたところ、大雨が降り注いだことから始まった。

生根神社(大阪市西成区)のだいがくは高さ20mの柱に約70個の提灯を飾り付けたもので、かつては各所にあったが戦災などで消失し、現在は同社に保存されている1基のみとなっている。昭和47年に大阪府の有形文化財に指定され、これが公開されるのは、生根神社夏祭りの7月24日(宵宮)と25日(本祭)の2日間のみ。「だいがく音頭」や「だいがく担ぎ」なども奉納され、その古式ゆかしく壮観な祭りを楽しもうと多くの人たちで賑わう。